訓讀説文解字注（七）

森　賀　一　惠

富山大学人文学部紀要第 73 号抜刷
２０２０年８月

訓讀説文解字注（七）

森　賀　一　惠

「訓讀説文解字注（六）」に續いて，段玉裁『説文解字注』第十二篇上を訓讀し，注を附す。

凡例

『訓讀説文解字注』金册～匏册に倣う。説解原文に（一）（二）（三）等の漢數字の番號を附したのは，段注の入るべき箇所を示したもので，説解原文，段注に 1）2）3）等のアラビア數字の番號を附したのは，訓讀者注の被注箇所を示したものである。

十二篇上（手部「揃」～「捧」）

𢹂，摵也 (一)，从手剡聲 (二)，

揃，摵（な）づる也，手に从ふ，剡の聲，

（校）小徐，「剡聲」下に「一曰竊也」四字有り。二徐「剡」を「前」に作る。

（一）「摵」の訓は下に見ゆ。「揃」，「摵也」と謂ふは『急就篇』の「沐浴，揃摵，合同寡（すくな）し」[1]，『莊子』の「眥媙以て老を休（やす）んずるべし」，本亦た「揃摵」に作る[2]。「揃摵」なる者は道家の修養の法，故に莊「以て老を休んずるべし」と云ひ，史游「沐俗合同寡し」と類言す。「合同寡し」は卽ち嗇精寡慾の説也。士喪禮[3]、士虞禮[4]の「蚤揃」の若きは，「蚤」は讀みて「爪」と爲し爪

1）四庫全書本、王應麟補注本、張傳官校理本卷 3，第 15 章。顔師古注に「濯髮曰沐，澡身曰浴，揃摵謂鬄拔眉髮也，蓋去其不齊整者」。王應麟『困學紀聞』卷 8 に「急就篇，沐浴，揃摵，寡合同，莊子外物篇，眥媙可以休老，亦作揃摵」。

2）外物篇。釋文に「眥，子斯反，徐子智反，亦作揃，子淺反，三蒼云，揃猶翦也，玉篇云，滅也」，また「媙，本亦作摵，音滅，又武齊反，字林云枇也，枇音千未反」。法偉堂校記「未，盧依宋本改米，是，惟兩枇時，當從扌，尚未議及」。

3）「蚤揃如他日」。注に「蚤讀為爪，斷爪，揃鬚也」。

4）「沐浴櫛搔翦」。阮元本は「蚤」を「搔」に「揃」を「翦」に作る。注に「搔當為爪，今文曰沐浴搔翦，或為蚤揃，揃或為鬄」釋文に「搔，依注音爪」，また「揃，子淺反，注鬄同」，校勘記に「搔，監本誤從木。翦，釋文作揃，張氏曰，經曰沐浴櫛搔鬄，按釋文云，揃，子淺反，注鬄同，既曰注鬄同，則鬄非經文也，又注云，揃或為鬄，此揃必指經也，從釋文○按經文翦字，張氏作鬄，考嚴徐鍾諸本，俱作翦，與張氏不合，未詳其故，注云，搔翦或為蚤揃，如釋文及張氏説，則翦揃宜互倒，乃與經相應，戴校集釋刪注中翦揃二字，但云搔或為蚤，以為据釋文，不知翦字習見揃鬄難識，故但為揃鬄作音，非必注中無翦字也」。

を斷つを謂ひ,「揃」は讀みて「翦」[5] と爲し, 許は「剃」に作り[6], 須を剃(そ)るを謂ふ也。士虞禮「揃」或いは「鬋」[7] に爲る[8]。曲禮亦た「蚤鬋」に作り, 注に云く,「鬢を鬋る也」と[9]。「鬋」を釋して鬢髮を剃理すると爲す。是れ禮經の「揃」字,「剃」若しくは「鬋」の叚借と爲し而して「揃」の本義を用ひず。顔師古『急就』に注して曰く「揃摵は眉髮を鬚[10] 拔するを謂ふ也, 蓋し其の齊整ならざる者を去る」と。顔氏誤りて禮經の「揃」を以て莊、史の「揃摵」を釋す。是れ誤りて叚借を以て本義と爲す也。訓詁其の源に通じざれば, 斯ち誤り此くの如き者有り。○『莊子』釋文『三倉』を引きて云ふ「揃は猶ほ翦のごとき也」と。「猶ほ翦のごとし」と云ふは則ち翦は本義に非ず。『三倉』叚借を言ふを妨げず。惟だ『說文解字』は叚借を言はず。

(二) 卽淺の切, 十四部。

[illegible], 𢽾也 (一), 从手威聲 (二),

摵, 𢽾(な)づる也, 手に从ふ, 威の聲,

(校)「𢽾」, 大徐「批」に作り, 小徐「批」に作る。

(一)「𢽾」[11], 各本「批」[12] に作る。小徐本及び『集韵』[13]、『類篇』[14]、『廣韵』[15]「批」に作る。今正す。「批」なる者は「批」の譌り,「批」なる者は「𢽾」の譌り也。手部「𢽾」「批」二篆は義別なり。「𢽾」下に云ふ「一に曰く, 𢽾は頰旁を摵づる也」と。此こに「摵は𢽾づる也」と曰ふと相ひ轉注爲り。『廣韵』[16]、『玉篇』[17] 皆な「摵」なる者は「摩づる也」と曰ふ。然らば則ち「頰旁を摵づる」なる者は其の頰旁を摩づるを謂ふ。養生家の一法。故に『莊子』に曰く「靜黙以て病を補なふ

---

5) 四篇上 (19b) 羽部「翦, 羽生也, 一曰, 矣羽」段注に「羽初生如前齊也, 前, 古之翦字, 今之𦐇字」また「翦者前也, 前者斷齊也」。

6) 四篇下 (42b) 刀部「剃, 齊斷也」段注に「禮經蚤揃, 假借揃爲之, 又或爲鬋, 今字作剪, 俗」。

7) 九篇上 (23b) 髟部「鬋, 女鬢垂皃也」段注に「曲禮不蚤鬋, 士虞禮蚤翦, 翦或爲鬋, 鬋皆翦之假借字也, 喪大記爪手翦須, 可證」。

8) 士虞禮注 (注 4)) 參照。

9) 曲禮下。注に「蚤讀為爪, 鬋, 鬋鬢也」。

10) 今本 (四庫全書本、王應麟補注本、張傳官校理本) は「鬚」を「鬚」に作る。注 1) 參照。九篇上 (24a) 髟部「鬚, 髭也」段注に「按鬚與鬚義別, 音亦有異」, 九篇上 (26b) 髟部「鬚, 鬏髮也」段注に「今文鬚爲剔, 禮經此鬚, 周禮禮記作肆, 皆託歷反, 本非鬚字也, 而今之禮經作鬚, 則亦譌字而已矣」。

11) 十二篇上 (38b) 手部「𢽾, 積也, ……, 詩曰, 助我舉𢽾, 一曰摵頰旁也」。小徐同じ, 大徐「一曰」二字無し。p.141 參照。

12) 下篆。十二篇上 (32b) 手部「批」字説解 (次頁) 參照。

13) 入十七薛・滅 (莫列切) 小韻「摵, 説文批也」。

14) 十二上「摵, 莫列切, 說文批也, 文一」。

15) 入十七薛・滅 (亡列切) 小韻「摵, 手拔, 又摩也, 批也, 捽也」。「批也」は『説文』の引用ではない。

16) 上注參照。

17) 手部第六十六「摵, 民烈切, 摩也, 莊子云, 揃摵, 拔除也」。

べく，眥嫩以て老を休んずるべし」と。「眥嫩」は卽ち「𢹂摵」の叚借字。一本「揃摵」に作る。釋文『字林』を引きて「摵、批也。千米反」と。[18]「批」は亦た「𢹂」の誤り。「批」に作るが若きは則ち「搥」の俗字,「手を反して擊つ也」と訓ず[19]。尤も誤れり。○按ずるに『廣韵』、『玉篇』に「摩也」と云ふは，此の字の本義。『廣韵』又た曰く「批也」と。「批」は卽ち「拙」の誤り。又た曰く「捽也」と。「捽」は卽ち「拙」の解也。又た云く「手もて拔く也」と。『玉篇』に云く「莊子に揃摵と云ふは拔除也」と。是れ皆な師古『急就篇』注を用ひ而して誤る。蓋し訓詁の難此くの如し。

（二）亡列の切，十五部。

𢹂，捽也 (一)，从手此聲 (二)，

拙，捽(つか)む也，手に从ふ，此の聲，

（一）「捽」の訓 下に在り[20]。按ずるに玄應の書『說文』「拙は撕也」を网引し,「撕は居逆の反，撕を撮み取ると謂ふ也」と。又た『通俗文』を引きて「掣挽するを拙と曰ふ」と[21]。按ずるに玄應の本 今本に較べて長と爲す。但だ許本「撕」[22] 無く，祇だ「戟」[23] を用ふるのみ。是れ亦た俗字を以て許書を改むる也。

（二）側氏の切，十五、十六部[24]。此れ下「手」上「此」の字と義別なり[25]。

𢹂，捽也，从手卽聲 (一)，魏郡有掷裴侯國 (二)，

掷，捽(つか)む也，手に从ふ，卽の聲，魏郡に掷裴有り，侯國，

18）外物篇。注 2）參照。

19）十二篇上（46a）手部「搥，反手擊也」段注に「俗作批」。

20）十二篇上（32b）手部。次頁參照。

21）卷三･放光般若經第四卷に「不**拙**，側買、子尔二反，謂取著也，通俗文，掣挽曰**拙**，說文，**拙**，**撕**也，謂**撕**撮取也，大品經作不取是也」，また卷十八･雜阿毗曇心論第四卷に「言**拙**，側買、子尔二反，說文，**拙**、**撕**也，**撕**音居逆反，謂**撕**撮取也，通俗文，掣挽曰拙」。

22）『大廣益會玉篇』手部第六十六「**撕**，記郤切，漢書注云，撕謂拘持之也」，『廣韻』入二十陌･戟（几劇切）小韻「**撕**，持也」。

23）十二篇下（36a）戈部「**戟**，有枝兵也」

24）側氏の切（四紙）は今韵古分十七部表（『六書音均表』一）では十六部，此聲は古十七部諧聲表（『六書音均表』二）では十五部。詩經韵分十七部表（『六書音均表』四）弟十五部・古本音にも此聲の「泚」「訿」「柴」が見え，それぞれ「泚，此聲在此部，詩一見，今兼入紙，凡此聲字漢人多入十六部用」，「**訿**，此聲在此部，詩一見，今兼入紙」，「柴，此聲在此部，詩一見，今入佳」という。今韻からみるといずれも十六部になり,「凡そ此聲の字，漢人多く十六部に入れて用ふ」とされる。また弟十六部に此聲の「雌」が見え，本音在弟十五部，詩小弁合韵伎枝知字，爲此聲字入十六部之始矣」という。

25）十二篇上（38b）「**𢹂**」字說解。p.141 參照。

（一）子力の切，古音十二部に在り。[26]

（二）『漢』地理志「卽」に作り[27]，王子侯表「抑」に作る[28]。此れに據れば則ち今本地理志誤れる也。

𢮿，持頭髮也（一），从手卒聲（二），

𢮿，頭髮を持つ也，手に从ふ，卒の聲，

（一）金日磾傳「日磾 胡を𢮿み，何羅を殿下に投ぐ」，孟康曰く「胡，音互，𢮿胡は今の相僻臥輪[29]の類の若き也」，晉灼曰く，「胡は頸也，其の頸を𢮿み而して殿下に投ぐる也」と[30]。

（二）昨没の切，十五部。

𢮿，四圭也（一），从手最聲（二），亦二指撮也（三），

撮，四圭也，手に从ふ，最の聲，亦た二指もて撮（つま）む也，

（校）小徐同じ。大徐，「四圭也」下「一曰兩指撮也，从手最聲」に作る。

（一）『漢』律厤志に曰く「多少を量る者は圭撮を失せず」，孟康曰く「六十四黍を圭と爲す」と[31]。按ずるに『廣韵』「圭」下に云ふ「孟子曰く，六十四黍を一圭と爲し，十圭を一合と爲す」[32]と。「孟子」は卽ち孟康。『經典釋文』序錄に『孟子注老子』二卷有り。「或ひは曰く，孟康也，康 字は公休」[33]。『孫子筭經』に「六粟を一圭と爲し，十圭を一撮と爲し，十撮を一抄と爲し，十抄を一勺と爲し，十勺を一合と爲す」[34]と。説 孟と異なれり。『本艸』序例に曰く「凡そ散藥に刀圭と云ふ者有り。方寸匕を十分するの一，准（なぞら）ふれば梧桐子の大きさの如き也。一撮なる者は四刀圭也，十撮を一勺と爲し，十勺を一合と爲す」と[35]。此れ蓋し醫家四圭を用て撮と爲すの説。相ひに發明すべし。

（二）倉括の切，十五部。

（三）大徐「一に曰く，兩指もて撮む也」に作る。按ずるに許は此れ別ちて一義と爲す。而し

26）子力切（二十四職）は，今韵古分十七部表（『六書音均表』一）では一部。卽聲は，古十七部諧聲表（『六書音均表』二）で十二部。

27）地理志上「魏郡，……，縣十八，……，卽裴，（侯國，莽曰卽是），……」。

28）王子侯表上。孝武「抑裴戴侯道（鄭氏曰，**抑**裴音即非，在肥鄉縣南五里，即非成也）」。中華書局本校勘記「成，王先謙説成當作城，按景祐本、殿本都作城」。

29）未詳。

30）『漢書』。顔注は孟説、晉説を引き，「晉說是也。𢮿音才乞反。」晉説是也，𢮿音才乞反」という、

31）律曆志上。顔注「應劭曰，圭，自然之形，陰陽之始也，四圭曰撮，三指撮之也，孟康曰，……，師古曰，撮音倉括反」。

32）上平十二齊・圭（古攜切）小韻。

33）注解傳述人・老子の條に「孟子注二卷」下に「或云，孟康，康字公休，安平廣宗人，魏中書監廣陵亭侯」。

34）四庫全書本『孫子算經』卷上。

35）四庫全書本『證類本草』卷一・序例上「凡散藥有云刀圭者，十分方寸匕之一准如梧桐子大也，方寸匕者，作匕正方一寸，抄散取不落為度，……，一撮者四刀圭也，十撮為一勺，十勺為一合，……」。

て應仲遠『漢』に注して云く「圭は自然の形, 陰陽の始。四圭を撮と曰ふ。三指もて之を撮む也」[36]と。是れ二義と説かず。三指撮む所を四圭と爲す。則ち四圭甚だ少なし。殆ど卽ち孫子謂ふ所の「六粟を圭と爲す」か。二十四粟，三指もて撮むべき也。小徐本「二指」に作る。「二」疑ふらくは「三」の誤りならん。大徐本又た改めて「兩」と爲す耳(のみ)。「圭」なる者は「瑞玉，上圜下方」[37]。故に應「自然の形，陰陽の始」と云ふ。「易の數，陰は六に變ず」[38]。故に六粟を圭と曰ふ。

𢷬，撮也 (一)，从手，籀省聲 (二)，
𢷬，撮む也，手に从ふ，籀の省聲，
（校）大徐同じ。小徐，「𢷬」を「掏」に作り，「籀」を「鞫」に作る。
（一）此れ「三指もて撮む」を蒙けて言ふ。「四圭」を蒙けざる也。
（二）居六の切, 三部。按ずるに字の音を同じくする者三有り。此れ「三指もて撮む」を謂ふ也。「臼」は「手を叉む」[39] を謂ふ也。「匊」は「手に在る」[40] を謂ふ也。

𢷬，撮取也 (一)，从手帶聲，讀若詩曰蟡蝀在東 (二)，𢷬，撕或从斳，从示 (三)，网手急持人也 (四)，
撕，撮み取る也，手に从ふ，帶の聲，讀みて詩に曰ふ，蟡蝀東に在りの若くす，𢷬，撕或ひは斳に从ひ，示に从ふ，网手もて急に人を持する也，
（校）小徐「帶」下に「聲」字無し。小徐「詩曰蟡蝀在東」を「詩蟡蝀之蟡」に作る。小徐「斳」下に「从」字無し。小徐「𢷬」説解下に「徙」を出し，「徙」下に「古文撕從止辵」六字有り。
（一）撮みて之を取るを謂ふ。亦た「三指もて撮む」を蒙けて言ふ也。有司徹「乃ち魚、腊の俎に摭(ひろいと)り，俎に三个を釋(お)き，其の餘は皆な之を取る」と，「古文，摭 [41] を撕に爲る」[42]。『儀禮』宋本、嘉靖本、單行疏本、『釋文』宋本皆な是くの如し。俗本に「今文, 摭を揲 [43] に爲る」に作る者は非也。凡そ「撮」と言ふ者は皆な少しく取るを謂ふ。禮經古文に依るを是と爲す。西京の賦「飛鼈を撕る」，

36）『漢書』律曆志上「量多少者不失圭撮」注。注 31）參照。
37）十三篇下（39b）土部「圭」説解。
38）十四篇下（16a）六部「六」説解。
39）三篇上（39b）臼部「臼，叉手也」，段注「居玉切，三部」。
40）九篇上（36a）勹部「匊，在手曰匊」，段注「居六切，三部」。
41）十二篇上（43a）手部「拓, 拾也, 陳宋語, ……, 摭, 拓或从庶」段注に「儀禮摭古文作撕, 此實非一字, 因雙聲而異」。
42）有司徹注。釋文に「為撕，之石反，劉音與摭同」。阮元校勘記に「古文摭爲撕，古，徐本、集釋、通解俱作古，毛本作今，撕，徐本作撕，毛本作楪，葛本、集釋俱作揲，按宋本釋文亦作撕，今本作揲，五經文字手部有撕字，云，之石反，見禮經」。
43）十二篇上（26b）手部「揲，閱持也」。

亦た撮み取るを謂ふ。薛の解に云ふ「之を捎み取る也」と[44]。文の賦「意徘徊し而して揥する能はず」[45],「揥」當に是れ「擿」の誤りなるべし。今俗語に「捎帶」と云ふ者は當に「擿」に作るべし。

（二）讀みて蟹の若くするを謂ふ也。都計の切，十五部。『經典釋文』「之舌の切」[46]。李善「大結の切」[47]。

（三）蓋し斬に从ひ而して示の聲。

（四）其の義別有り。『廣韵』二形一字を云はず[48]。

𢷬，引堅也（一），从手孚聲（二），詩曰，原隰𢷬矣（三），𢷬，𢷬或从包（四），

𢷬，引きて堅(あつ)むる也，手に从ふ，孚の聲，詩に曰く，原隰に𢷬(あつ)まると，抱，𢷬或ひは包に从ふ，

（校）二徐，「堅」を「取」に作る。大徐，「詩」以下六字無し。

（一）「堅」[49]，各本「取」に作る。今正す。『詩』釋文「堅」に作る。今本譌りて「取土」二字に爲るは非也[50]。「堅」，義「聚」[51]に同じ。「引堅」なる者は引きて聚めしむる也。『玉篇』正し

44）『文選』卷 2。薛綜注。李善注に「**擿**，大結切」。

45）『文選』卷 17。李善注に「説文曰，揥，取也，佗狄切，協韻佗帝切，或為禘，禘猶去也」というが，『説文』に「揥」字は無い。

46）注 42）引く『儀禮』有司徹釋文。今本は「舌」を「石」に作る。法偉堂校記に「阮云，石當作舌，於音理亦合，惟無可證」。

47）西京賦注。注 44）參照。

48）去十二霽・帝（都計切）小韻に「**擿**，撮取」，「**揥**，兩手急持人也」，また第（特計切）小韻に「**揥**，兩手急持人」，「**擿**，取也」。入十六屑・姪（徒結切）小韻に「**擿**，捎取」。

49）十三篇下（32a）土部「堅，積土也」。二徐は「土積也」。段注に「𢷬下曰，引堅也，引申爲凡聚之偁，各書多借爲聚字，……，才句切，古音在四部」。

50）大雅・緜「捄之陾陾」傳「捄，蘟也，陾陾，眾也，度，居也」箋「捄，𢷬也，度猶投也，築牆者，𢷬聚壤土，盛之以蘟，而投諸版中」疏「以傳文略故足成之，說文云，𢷬，引取也」釋文「𢷬也，薄侯反，爾雅云，聚也，說文云，引取土」。阮元校勘記「捄𢷬也，小字本、相臺本同，閩本、明監本、毛本𢷬誤俘，下及正義同，考文古本下作𢷬○按說文𢷬引堅也，今本堅作取，誤○［補］案十行本分作取土二字，尤誤」法偉堂校記「土，盧、阮並云，正義作引取也，不誤，段氏欲合取土二字爲堅，似未確」。**捄𢷬**也小字本相臺本同閩本明監本毛本**𢷬**誤桴下及正義同考文古本下作**𢷬**○按說文**𢷬**引**堅**也今本**堅**作取誤○［補］案十行本分作取土二字尤誤又**捄**音**俱**呂沈同沈當作忱**捄𢷬**也小字本相臺本同閩本明監本毛本**𢷬**誤桴下及正義同考文古本下作**𢷬**○按說文**𢷬**引**堅**也今本**堅**作取誤○［補］案十行本分作取土二字尤誤又**捄**音**俱**呂沈同沈當作忱**捄𢷬**也小字本相臺本同閩本明監本毛本**𢷬**誤桴下及正義同考文古本下作**𢷬**○按說文**𢷬**引**堅**也今本**堅**作取誤○［補］案十行本分作取土二字尤誤又**捄**音**俱**呂沈同沈當作忱**捄𢷬**也小字本相臺本同閩本明監本毛本𢷬誤桴下及正義同考文古本下作**𢷬**○按說文𢷬引堅也今本堅作取誤○［補］案十行本分作取土二字尤誤又**捄**音**俱**呂沈同沈當作忱**捄𢷬**也小字本相臺本同閩本明監本毛本𢷬誤桴下及正義同考文古本下作**𢷬**○按說文**𢷬**引**堅**也今本**堅**作取誤○［補］案十行本分作取土二字尤誤又**捄**音**俱**呂沈同沈當作忱**捄𢷬**也小字本相臺本同閩本明監本毛本**𢷬**誤桴下及正義同考文古本下作**𢷬**○按說文**𢷬**引**堅**也今本**堅**作取誤○［補］案十行本分作取土二字尤誤又**捄**音**俱**呂沈同沈當作忱**捄𢷬**也小字本相臺本同閩本明監本毛本**𢷬**誤桴下及正義同考文古本下作**𢷬**○按說文**𢷬**引**堅**也今本**堅**作取誤○［補］案十行本分作取土二字尤誤又**捄**音**俱**呂沈同沈當作忱

51）八篇上（45b）**仙**部「聚，會也，……」段注に「古亦叚堅爲聚」。

く「引聚也」に作る[52]。大雅「之を捄ること陾陾[53]たり」, 傳に曰く「捄は蘽也, 陾陾は眾也」, 箋に云く「捄は捊也，度は投也，築牆なる者は壤土を捊聚し之を盛るに蘽を以てし而して諸を版中に投ず」と。此れ「引聚」の正義，箋と傳と互ひに相ひ足す。賓筵の「仇」，鄭讀みて「斛」と爲す[54]。此の「捄」、鄭釋して「捊」と爲す。皆な其の音の相ひ近きに於いて其の義を得る也[55]。常棣「原隰に裒まる」, 傳に云く「裒は聚也」[56]。此れ「聚」を重んじ「引」を重んぜず。故に「引」を言はず，但だ「聚也」と言ふ。「裒」[57]なる者は「捊」の俗，『易』「君子は以て多を裒らして寡を益す」, 鄭、荀、董、蜀才「捊」に作り,「取也」と云ふ[58]。此れ「引」を重んず。故に但だ「取也」と言ふ。

（二）步侯の切，三部。

（三）六字，小徐本有り。『玉篇』引きて亦た有り[59]。

（四）古音は孚聲、包聲同じく三部に在り。後人「抱」を用ひて褱褒の字[60]と爲す。蓋し古今字の同じからざること此くの如し。

𢷬，自關以東取曰揜(一)，从手弇聲(二)，一曰覆也(三)，

揜，關自り以東は取を揜曰ふ，手に从ふ，弇の聲，一に曰く，覆也，

52）『大廣益會玉篇』手部第六十六「捊，步溝切，説文曰，引聚也，詩曰，原隰捊矣，捊，聚也，本亦作裒」。

53）阮元本は「**陾**」を「陾」に作る。注 50）參照。十四篇下（12a）**𠙵**部に「陾, 築牆聲也, 从𠙵耎聲, 詩曰, 捄之陾陾」段注に「按箋與傳不異，箋之投卽傳之居，詩之捄謂捊土，度謂投版中，然後乃築之登登然，則毛傳謂陾陾眾也爲長，許謂築牆聲，似非是，又其篆从耎聲，則與如乘切相去甚遠，依玉篇手部作捄之**陾陾**，則之韵而聲可轉入蒸韵，如耳孫之卽仍孫也，蓋其字从**𠙵**，故許必云築牆以傳合之，而聲則或譌爲耎聲」。

54）小雅・賓之初筵「賓載手仇，室人入又」傳「手，取也，室人，主人也，主人請射於賓，賓許諾，自取其匹而射，……」箋「仇讀也**鄭**，室人有室中之事者，謂佐食也，又，復也，賓手挹酒，室人復酌為加爵」釋文「手仇，毛音求，匹也，鄭讀為斛，音俱，謂挹取酒」。

55）八篇上（36a）人部「仇，讎也」段注に「巨鳩切，三部」。十四篇上（34b）斗部「**斛**，挹也」段注に「挹亦抒也，詩箋、禮注皆用**斛**，皆謂挹酒於尊中也，如鄭說，則賓筵之仇乃此字之叚借」また「舉朱切，古音蓋在三部，故鄭得以易仇字」。「仇」「**斛**」二字の義は異なり，中古音も異なるが，九聲は三部なので，段氏はともに古音三部で通じるとする。十二篇上（48a）手部「捄, 盛土於梩中也, ……, 一曰捊也, 詩曰, 捄之**陾陾**」。但し二徐は「捊」を「擾」に作る。段注「各本作擾, 今依韵會本正, 捊者引堅也, 於前義相近, 捊之乃後盛之」, また「舉朱切。古音在三部」。「捄」「捊」二字も義も中古音も異なるが,「捄」段注では，義が近いとし，またテキストを改め「捊」を「捄」の一義とする。ここでは「求聲」「孚聲」がいずれも三部であることから，音が近いとして「捄，捊也」を説明する。

56）小雅。釋文「裒矣，薄侯反，聚也」。

57）『大廣益會玉篇』衣部第四百三十五「裒，扶溝、步九二切，減也，聚也」。『廣韻』下平十九侯・裒（薄侯切）小韻「裒，聚也」

58）謙・象辭。釋文「裒，蒲侯反，鄭、荀、董、蜀才作捊，云，取也，字書作掊，廣雅云，掊，減」。阮元校勘記に「君子以裒多益寡，岳本、閩、監、毛本同，石經裒作褒，釋文……」。

59）注 52）參照。

60）八篇上（56a）衣部「**褱**，褱也」段注に「今字抱行而**褱**廢矣，抱者引**堅**也」。

（校）小徐，「東」下に「謂」字有り。大徐，「从手弇聲」四字「一曰覆也」の下に在り。

（一）「取」上，俗本「謂」字有り。今宋本に依る。『方言』に曰く「掩、索，取也。關自り而東は掩と曰ひ，關自り而西は索と曰ひ，或ひは担と曰ふ」[61] と。按ずるに許據る所の『方言』は蓋し「揜」に作る。李善 子虚、上林の賦に注して『方言』を引き亦た「揜」に作る也[62]。今『廣雅』「掩は取也」[63]，字「掩」に作る。

（二）衣檢の切，七部。

（三）「弇は蓋也」[64]。故に「弇」に从ふの「揜」を「覆」と爲す。凡そ大學「其の不善を揜ふ」[65]，中庸「誠の揜ふべからざる」[66]，皆な是れ。

𢾊，予也 (一)，从手受 (二)，受亦聲 (三)，

授，予也，手受に从ふ，受亦た聲，

（校）大徐，「手」下に「从」字有り。小徐，「从手受受亦聲」を「从手受聲」に作る。

（一）「予」なる者は「推（タイ）予する也，相ひ予ふるの形に象る」[67]。

（二）手もて之を付し、其をして受けしむる也。故に「手」「受」に从ふ。

（三）殖酉の切，三部。

𢾊，奉也，受也 (一)，从手卩収 (二)，

承，奉ぐる也，受くる也，手卩収に从ふ，

（校）大徐，「卩」上「収」上に「从」字有り。

（一）収部に曰く「奉」なる者は「承（すす）む也」[68] と。是れ二篆轉注爲る也。受部に曰く「受」なる者は「相ひ付する也」[69] と。凡そ「承受」、「承順」、「承繼」と言ひ，又た魯頌の傳に「承は止也」[70] と曰ふは皆な「奉」の訓也。凡そ「或ひは之に羞を承（すす）む」[71]、「之を承劒を以てす」[72] と言ふは皆

61）巻 6。
62）『文選』巻 7 子虚賦「揜翡翠射鵠**鸛**」注，巻 8 上林賦「捎**鳳**皇**捷**鵷鷟揜焦朋」注に「方言曰，揜，取也」。
63）釋詁一上。
64）三篇上（36a）**収**部「弇」説解。段注に「釋言曰，弇，同也，弇，蓋也，此與奄，覆也音義同」。
65）釋文「揜其，於檢反」
66）釋文「不可揜，音掩，於檢反」。
67）四篇下（4b）予部「予」説解。
68）三篇上（35b）収部「奉」説解。
69）四篇下（6a）「受」説解。
70）閟宮「戎狄是膺，荆舒是懲，則莫我敢承」傳。
71）『周易』恆・九三象辭。
72）『左傳』哀公十六年傳。注「拔劒指其喉」

な「相ひ付する」の訓也。『左傳』に曰く「蔡大夫 昭侯の又た遷らんことを恐るる也承らす」[73] と。此れ「承」を叚りて「懲」[74] と爲す也。

（二）三字を合す。會意。署陵の切，六部。

𢷬，給也 (一)，从手臣聲 (二)，一曰約也 (三)，

抯，給する也，手に从ふ，臣の聲，一に曰く，約す也，

（校）小徐，「从手臣聲」四字「一曰約也」の下に在り。

（一）「給」なる者は「相ひ足す也」[75]。士喪禮に曰く「乃ち沐し櫛り，抯ふに巾を用ふ」[76]，又た曰く「浴せしむるに巾を用ひ，抯ふに浴衣を用ふ」[77]，注に曰く「抯は晞也，清也」と。按ずるに「晞」なる者は之を「乾かす也」[78]。「浴せしむるに巾を用ふ」。既に巾を以て之を拭き而して復た浴衣を以て之を抯ふ。之を抑按して乾かしむるを謂ふ。此れ乾き彼れ溼る，互ひに相ひ足すべし。故に「給也」と曰ふ。『爾雅』に曰く「抯、拭、刷は清也」[79] と。之を渾言する也。之を析言すれば，則ち「抯」は「拭」と同じからず。故に許書，「巾は飾也」[80]「撙は飾ふ也」[81] を一義と爲し，「抯は給也」を又た一義と爲す也。

（二）章刃の切，十二部。

（三）「約」なる者は「纏め束ぬる也」[82]。此れ「抯」の別の一義也。

𢷬，飾也 (一)，从手堇聲 (二)，

撙，飾ふ也，手に从ふ，堇の聲，

（校）二徐，「飾」を「拭」に作る。

（一）「飾」，各本「拭」に作る。今正す。又部に曰く，「巾」なる者は「飾ふ也」[83] と。巾部に

73）哀公四年傳「春，蔡昭侯將如吳，諸大夫恐其又遷也承」注「承音懲，蓋楚言」。校勘記「岳本言下有也字，惠棟云，承讀為懲，經傳無文，詩魯頌曰，戎狄是膺，荊舒是懲，則莫我敢承，毛傳曰，承，止也，傳言承者，謂諸大夫皆欲止之也」。

74）十篇下（51a）心部。「直陵切，六部」。

75）十三篇上（9b）糸部「給」説解。

76）注「抯，晞也，清也，古文抯皆作振」，釋文「抯用，之慎反，劉居吝反，晞也，清也」。

77）注「用巾，用拭之也，喪大記曰，御者二人浴，浴水用盆，沃水用枓」。

78）七篇上（12a）日部「晞，乾也」。

79）釋詁下。注「振、訊、**扲**、拭、掃、刷，皆所以為絜清」，釋文「抯，音震」

80）三篇（18b）又部「巾」説解。二徐は「飾」を「拭」に作る。段注に「飾各本作拭，今依五經文字正，巾部曰，飾，巾也，彼此互訓，手部無拭字」。

81）二徐は「**撙**，拭也」。下字注參照。

82）十三篇上（8a）糸部「約」説解。

83）注 80）參照。

曰く,「飾」なる者は「厤ふ也」[84] と。「飾」「拭」は正俗字。淺人盡く許書の「飾」を改めて「拭」と爲して自り，字例晦し矣。「撣」は「拒」と伍を爲せば，則ち妝飾[85] に非ざる也。『周禮』遺人「以て民の囏阨(カンヤク)を恤(うれ)ふ」注に云ふ,「故書，囏阨を撣阨に作る」[86] と。按ずるに此れ古文叚借字也[87]。

（二）居厥の切，十三部。

𢷬，撣也(一)，从手市聲(二)

抪，撣(ぬぐ)ふ也，手に从ふ，市の聲，

（校）二徐,「抪」篆,「接」下「抭」上に在り。

（一）今人 拂(フツ)拭の字を用ひ當に此の「抪」に作るべし。許は「抪飾」に作る也。「拂」なる者は「過ぎて擊つ也」[88]。其の義に非ず。

（二）普活の切, 十五部。〇此の篆, 舊と「接」篆の下に次す。古へに非ざる也。今此こに移す。[89]

𢷬，朋羣也(一)，从手黨聲(二)，

攩，朋羣也，手に从ふ，黨の聲，

（一）此れ「鄉黨」、「黨與」の本字。俗に「黨」を用ふる者は叚借字也。鳥部「朋」下に曰く,「古文の鳳也，鳳飛べば羣鳥從ふに萬を以て數ふ，故に以て朋攩の字と爲す」[90] と。儒林傳「唯だ京氏のみ異黨爲り」，師古曰く「黨は讀みて儻と曰ふ」[91] と。按ずるに「儻」[92] は當に「攩」に作るべし。

（二）多朗の切，十部。

84）七篇下（50a）巾部「飾」説解。段注に「又部曰，厤，飾也，二篆爲轉注，飾拭古今字，許有飾無拭，凡說解中拭字皆淺人改飾爲之」。

85）十二篇（21b）女部「妝，飾也」段注に「此飾篆引申之義也」。

86）地官。

87）十三篇下（40b）部に「艱，土難治也，…，囏，籀文艱，从喜」段注「引申之，凡難理皆曰艱，……，古閑切，古音在十三部」。

88）十二篇上（51b）手部「拂」説解。

89）段玉裁は「**撣**」という訓のため,「**抪**」篆を「**撣**」篆下に移すが，桂馥『義證』、王筠『句讀』は『説文解字篆韻譜』卷５入･末十三「**抪**，推也」,『玉篇』手部第六十六「**抪**，普活切，説文曰，推也」,『廣韻』入十三末･鏺（普活切）小韻「**抪**，推**抪**」を根據に「**撣**也」を「推也」の誤りではないかと疑い,『句讀』はテキストも「**抪**，推也」に改め,「蓋下文**抭**，推引也段氏遂迻之**撣**篆之後，益誤矣」という。

90）四篇上（38b）鳥部「鳳」説解。二徐本､段注本いずれも「攩」を「黨」に作る。段注に「此説叚借也，朋本神鳥，以爲朋黨字，……」。

91）原文「唯京氏為異黨焦延壽獨得隱士之說，託之孟氏，不相與同」。段玉裁は「異黨」を「異攩」と解釋し「黨」で句を切るが，中華書局本は顔注に從って,「黨」を假設の「儻(も)し」に讀み,「異」で切る。

92）「儻」は大徐新附字。八上人部・新附に「儻，倜儻也，从人黨聲，他朗切」。

𢷬，交也 (一)，从手妾聲 (二)，

接，交はる也，手に从ふ，妾の聲，

(一)「交」なる者は「脛を交ふる也」[93]。引申して凡そ相ひ接するの偁と爲す。『周禮』廩人「接盛」は「讀みて一扱再祭の扱と爲す」[94]。

（二）子葉の切，八部。

𢷬，推引也 (一)，从手同聲 (二)，漢有𢷬馬官，作馬酒，(三)，

𢷬，推して引く也，手に从ふ，同の聲，漢に𢷬馬の官有り，馬酒を作る，

（校）二徐，「推」を「𢷬」に作る。大徐，「從手同聲」四字「馬酒」下に在り。

（一）「推」各本「𢷬」[95] に作る。今『廣韵』[96]、『韵會』[97] 本に依る。「推」は讀みて「或ひは推し或ひは輓く」[98] の「推」の如くす。之を推して前ましむるを謂ふ也。

（二）徒總の切，九部。

（三）百官公卿表、禮樂志に見ゆ [99]。應劭曰く，「乳馬を主り，其の乳汁を取りて之を𢷬治す。

93）十篇下（9b）交部「交」説解。

94）地官「大祭祀則共其接盛」注「接讀為一扱再祭之扱, 扱以受春人春之」釋文「則接, 依注音扱」「一扱, 初洽反，劉初輒反，又差及反，李聶創涉反」。十二篇上（50b）手部「扱，收也」段注「楚洽切，七部」。

95）十二篇上（41a）手部「𢷬，褒也」。二徐は「褒」を「抱」に作る。

96）上一董･動（徒摠切）小韻に「𢷬，推引也，漢有𢷬馬官，作酒，又音同」，また上平一東･同（徒紅切）小韻に「𢷬，引也，漢官名有𢷬馬，又音動」。『説文』の引用とはしない。

97）上一董・動（杜孔切）小韻「𢷬，説文推引也，漢有𢷬馬官，作酒，前禮志……，李奇曰，……，前百官志注如淳曰，……，又東韻」，なお，「毛氏韻增」で上平一東・同（徒東切）小韻に「𢷬，推復引也，漢有𢷬馬官，作酒，詳見董韻杜孔切注」，「今增」で去一送・洞（徒弄切）小韻に「𢷬，説文，𢷬引也，从手同聲，漢有𢷬馬官，作馬酒，徐按漢書百官表，謂取馬乳作酒，又東韻」。

98）『左傳』襄公十四年傳「夫二子者，或輓之，或推之」。釋文「或輓，音晩」「或推，如字，又他回反」。

99）『漢書』百官公卿表「太僕，秦官，掌輿馬，有兩丞。屬官有大廐、未央、家馬三令，各五丞一尉，……，武帝太初元年更名家馬為𢷬馬」，注「應劭曰，主乳馬，取其汁𢷬治之，味酢可飲，因以名官也，如淳曰，主乳馬，以韋革為夾兜，受數斗，盛馬乳，𢷬取其上（把）〔肥〕，因名曰 𢷬馬，禮樂志丞相孔光奏省樂官七十二人，給大官 𢷬馬酒，今梁州亦名馬酪為馬酒，晉灼曰，𢷬音挺𢷬之𢷬，師古曰，晉音是也。𢷬音徒孔反應劭曰:「主乳馬，取其汁𢷬治之，味酢可飲，因以名官也。」如淳曰:「主乳馬，以韋革為夾兜，受數斗，盛馬乳，𢷬取其汁（把）〔肥〕，因名曰 𢷬馬。禮樂志丞相孔光奏省樂官七十二人，給大官 𢷬馬酒。今梁州亦名馬酪為馬酒。」晉灼曰:「𢷬音挺𢷬之𢷬。」師古曰:「晉音是也。𢷬音徒孔反。」應劭曰:「主乳馬，取其汁𢷬治之，味酢可飲，因以名官也。」如淳曰:「主乳馬，以韋革為夾兜，受數斗，盛馬乳，𢷬取其上（把）〔肥〕，因名曰 𢷬馬。禮樂志丞相孔光奏省樂官七十二人，給大官 𢷬馬酒。今梁州亦名馬酪為馬酒。」晉灼曰:「𢷬音挺𢷬之𢷬。」師古曰:「晉音是也。𢷬音徒孔反。」」，中華書局本校勘記「𢷬取其上（把）〔肥〕，景祐、殿本都作肥，王先謙説作肥是」。禮樂志「師學百四十二人，其七十二人給大官𢷬馬酒」注「李奇曰，以馬乳為酒，撞𢷬乃成也，師古曰，𢷬音動。馬酪味如酒，而飲之亦可醉，故呼馬酒也李奇曰:「以馬乳為酒，撞𢷬乃成也。」師古曰：「𢷬音動。馬酪味如酒，而飲之亦可醉，故呼馬酒也。」李奇曰：「以馬乳為酒，撞𢷬乃成也。」師古曰：「𢷬音動。馬酪味如酒，而飲之亦可醉，故呼馬酒也。」」。

味酢(す)く飲むべし。因りて以て官に名づく」と。如淳曰く,「乳馬を主り,韋革を以て夾兜を爲し,數斗を受けて，馬乳を盛り，其の上肥を挏す。因りて名づけて挏馬官と曰ふ。今梁州亦た馬酪を名づけて馬酒と爲す」と。『顔氏家訓』に曰く「此れ之を撞擣挺挏するを謂ふ。今酪酒を爲るも亦た然り」[100]。按ずるに「挺挏」の字『淮南子』に見ゆ[101]。

𢷬，手評也(一)，从手召聲(二)，

招，手もて評ぶ也，手に从ふ，召の聲，

（校）二徐,「評」を「呼」に作る。大徐國家圖書館蔵宋本、一篆一行本,「召」下に「聲」字無し。小徐,「聲」下に「也」字有り。

（一）「評」，各本「呼」に作る。今正す。「呼」なる者は「息を外にする也」[102]。「評」なる者は「召く也」[103]。口を以てせず而して手を以てす。是れ「手もて評ぶ也」。匏有苦葉の傳に曰く「招招は號召するの皃」[104]。按ずるに許書に「召」なる者は「評ぶ也」[105],「號」なる者は「嘑ぶ也」[106]と。是れ手を用ふる、口を用ふる，通じて「招」と云ふを得る也。

（二）止搖の切，二部。

𢹂，安也，从手𤔔聲(一)，一曰揗也(二)，𢹂，古文撫，从亾走，

撫，安んずる也，手に从ふ，𤔔の聲，一に曰く，揗づる也，亾，古文の撫，亾走に从ふ，

（校）小徐,「聲」下に「一曰掇也」四字有り。二徐,「揗」を「循」に作る。大徐,「古文」下に「撫」字無く,「亾走」を「走亡」に作る。

（一）芳武の切，五部。

100）勉學篇「又禮樂志云，……，李竒注……，二字並從手，**揰**（都抒反），**挏**（達孔反），此謂撞擣挺**挏**之，今為酪酒亦然」。

101）新編諸子集成『淮南鴻烈集解』本、『淮南子集釋』本に據ると，俶真訓に「提挈人間之際**撢**掞挺**挏**世之風俗」，また「而莫之要御夭遏者，其襲微重妙，挺**挏**萬物，揣丸變化，天地之間，何足以論之」。上「挺**挏**」注に「挺**挏**猶上下也，以求利便也」。莊逵吉校語に「挺，各本皆作挻，攷説文解字，挺，抜也，挻，長也，挺**挏**雙聲，應從藏本作挺爲是」。

102）二篇上（16b）口部「呼」説解。段注に「外息，出其息也，……，今人用此爲號嘑、**評**召字，非也」。

103）三篇上（18b）言部「**評**説解。段注に「後人以呼代之，呼行而**評**廢矣」。

104）邶風「招招舟子，人涉卬否」箋「舟人之子號召當渡者」釋文「招，照遙反，王逸云，以手曰招，以言曰召，韓詩云，招招，聲也」。

105）二篇上（18a）口部「召」説解。

106）五篇上（32a）号部「號」説解。但し，二徐は「嘑」を「呼」に作る。段注に「嘑各本作呼。今正。呼、外息也。與嘑義別。口部曰。嘑、號也。此二字互訓之證也」

（二）「揗」，各本「循」[107] に作る。今正す。「揗」なる者は「摩づる也」[108]。「拊」亦た「揗づ」と訓ず [109]。故に「撫」「拊」或ひは通用す。

𢹂，撫づる也 (一)，从手昏聲 (二)，一曰摹也 (三)，

𢹂，撫也，手に从ふ，昏の聲，一に曰く，摹也，

（一）此れ上「揗」と訓ずるの「撫」を冢けて言ふ。今人用ふる所の「抆」[110] 字、許土部「墀」下に用ふる所の「𢹂」字[111]，皆な卽ち「𢹂」字也。

（二）武巾の切，十三部。

（三）「摹」なる者は「規也」[112]。

𢹂，量也 (一)，从手耑聲 (二)，度高曰揣 (三)，一曰捶之 (四)，

揣，量る也，手に从ふ，耑の聲，高さを度（はか）るを揣と曰ふ，一に曰く，之を捶つと，

（校）小徐，「高」下に「下」字有り，「之」下に「也」字有り，「從手耑聲」四字，「捶之也」下に在り。

（一）「量」なる者は「輕重を稱（はか）る也」[113]。「稱」なる者は「銓（はか）る也」[114]。「銓」なる者は「衡（はか）る也」[115]。

（二）此れ合音を以て聲と爲す。初委の切，十四、十五部。按ずるに『方言』「常絹の反」[116]，是れ此の字の古音也 [117]。木部に「椯」字有り，「箠（う）[118] つ也。一に曰く，度（はか）る也。一に曰く，

107）二篇下（14b）彳部「循，行也」。二徐は「循，行順也」。段注に「各本作行順也，淺人妄增耳，依大誓正義、衆經音義所引訂」。「大誓正義」は『尚書』泰誓「王乃徇師而誓」偽孔傳「徇，循也」疏，「衆經音義」は『一切經音義』卷 13 罪業報應教化地獄經「循大」音義。

108）十二篇上（30a）手部「**揗**」の説解。「訓讀説文解字注（六）」（『富山大学人文学部紀要』第 72 号）p. 65 參照。

109）十二篇上（30b）手部「拊」の説解。「訓讀説文解字注（六）」（『富山大学人文学部紀要』第 72 号）p. 66 參照。

110）『爾雅』釋詁下「拒、拭、刷，清也」郭璞注に「振、訊、**抆**、拭、掃、刷，皆所以為絜清」。

111）巾部「**𢹂**」の誤りか。十三篇下（25b）土部「墀，涂地也，从土犀聲，禮，天子赤墀」，段注に「巾部曰，**𢹂**、墀地以巾捫之也」。「墀」説解には「**𢹂**」の字は無い。七篇下（53a）巾部「**𢹂**，**墀**地也，吕巾**𢹂**之，从巾**𡕒**聲，……」段注に「**𢹂**蓋卽手部**𢹂**字，今之**抆**字，𢹂者撫也，涂地以巾，按而摩之，如今之擦漆，……」。

112）十二篇上（47b）手部「摹」説解。

113）八篇上（47a）重部「量」説解。

114）七篇上（51b）禾部「稱」説解。

115）十四篇上（12b）金部「銓」説解。但し，段注本は「衡」を「稱」に作る。段注に「稱，各本作衡，今正，禾部稱，銓也，與此爲轉注，乃全書之通例，稱卽今秤字，衡者牛觸横大木其角，……」。

116）卷 12「度高爲揣」郭注。戴震疏證本、四庫全書本同じ，抱經堂叢本、錢繹箋疏本、周祖謨校箋本「常」を「裳」に作る、

117）今韵古分十七部表（『六書音均表』一）で，初委切（四紙）は十六部，常絹反（三十三線）は十四部。「耑聲」は古十七部諧聲表（『六書音均表』二）で十四部。

118）五篇上（15a）竹部「箠，所吕擊馬也」。二徐「所吕」二字無し。段注に「所吕二字今補」。

剟[119]る也」[120]。聲義皆な此の篆と同じ。而して「兜果の切」[121]に讀む。又た今人の語言「**故**敧」の字を用ふ。上は「丁兼の切」，下は「丁括の切」，「輕重を知る也」[122]。亦た「揣」の或體，其の音「耑」の雙聲爲り[123]。

（三）『方言』[124]同じ。『左傳』に「高卑を揣(はか)る」と，杜注して云ふ，「高さを度るを揣と曰ひ，深さを度るを仭と曰ふ」と[125]。按ずるに『國語』に「本を薄(ひとし)しくし末を肇(ただ)す」[126]と。「薄」は卽ち『孟子』「其の本を揣(はか)る」[127]の「揣」，其の義同じき也。

（四）「捶」なる者は「杖以て擊つ也」[128]。「棰」は「箠」と訓じ，「揣」は「捶」と訓ずるも，其の意一也。

𢷬，開也，从手只聲，讀若抵掌之抵[(一)]，

扺(シ)，開く也，手に从ふ，只の聲，讀みて抵掌の抵(シ)の若くす，

（校）「抵」，小徐祁刻本同じ，大徐「抵」に作る。

（一）「抵」，各本「抵」に作る。今正す。「抵」は手を側けて擊つ也[129]。「抵掌」なる者は此の手を側けて彼の手の掌を擊つ也。諸氏の切，十六部。

𢷬，習也[(一)]，从手貫聲[(二)]，春秋傳曰，摜瀆鬼神[(三)]，

摜，習ふ也，手に从ふ，貫の聲，春秋の傳に曰く，鬼神を摜瀆すと，

（一）此れ，辵部の「遺」[130]と音義皆な同じ。古へ多く「貫」[131]を叚りて之と爲す。

（二）古患の切，十四部。

119）四篇下（45b）刀部「剟，刊也」。

120）六篇上（50b）木部「棰」説解。但し，段注本は「剟」字上に「棰」字有り，「度」字上に大徐は「棰」字有り，小徐は「揣」字有り。

121）兜果切（三十四果）は，今韵古分十七部表（『六書音均表』一）では十七部だが，「**棰**」字も耑聲なので，段注に「古音當在十四部」。

122）『廣韻』下平二十五添・**髻**（丁兼切）小韻に「**故**，**故**敧，稱量」，入十三末・掇（丁括切）に「敧，**故**敧，知輕重也，……」。

123）七篇下（3a）耑部「耑」。大徐の反切は「多官切」。「丁兼切」，「丁括切」と同じく端母。

124）注 116）參照。

125）昭公三十二年傳。

126）齊語。韋昭注に「薄，等也，肇，正也，謂先等其本，以正其末也」。

127）告子下「不揣其本而齊其末」注「孟子言，夫物當揣量其本，以齊等其末，知其大小輕重，乃可言也」。

128）十二篇上（51a）手部「捶」説解。

129）十二篇上（51a）手部「抵，側擊也，从手氏聲」，段注に「諸氏切，十六部，與抵在十五部不同」。

130）二篇下（4a）辵部「遺，習也」段注に「此與手部摜音義同」「工患切，十四部」。

131）七篇上（29b）毌部「貫，錢貝之毌也」。二徐は「錢貝之貫」に作る。大徐は「也」字無し。

（三）昭二十六年『左傳』の文。今本「貫」に作る。杜曰く「貫は習也」と。[132]

𢱭，摘也 (一)，从手殳聲 (二)，

投，摘（なげう）つ也，手に从ふ，殳の聲，

（校）大徐，「殳聲」を「从殳」に作る。

（一）下文に云く「摘」は「投ぐる也」[133] と。二篆轉注爲り。巷伯の傳に曰く「投は棄つる也」と [134]。

（二）大徐，「殳に从ふ」に作るは，非 [135]。度矣の切，四部。

𢱭，搔也 (一)，从手適聲 (二)，一曰投也 (三)，

摘，搔く也，手に从ふ，適の聲，一に曰く，投ぐる也，

（一）此の義，音剔（テキ）。『詩』「象の揥也」，傳に曰く「揥は髮を摘（か）く所以也」，釋文に云ふ「揥，勑帝の反，摘，他狄の反，本又た擿に作るは，非也，擿，音直戟反」と [136]。按ずるに許說を以て之を繩（ただ）せば則ち「擿」に作るを是と爲す [137]。「擿」，正音は「他狄の反」也。[138] 象骨を以て首を搔き，因りて以て飾りと爲す。之を名づけて「揥」と曰ふ。故に「髮を擿く所以」と云ふ。卽ち後人の玉導 [139]、玉搔頭 [140] の類也。『廣韵』十二霽に曰く「揥なる者は揥枝，整髮の釵」[141] と。許書「揥」無し。

132）釋文「貫瀆，古患反，習也」。

133）十二篇上（35b）手部。下篆參照。

134）小雅。「投畀豺虎」傳。

135）三篇下（24b）殳部「殳，㠯杖殊人也，……，从又几聲」段注に「市朱切，古音在四部」。「市朱切」は上平十虞で五部だが，古十七部諧聲表（『六書音均表』二）では，几聲は「與十五部几別」として四部に，殳聲も四部に見える。

136）鄘風・君子偕老「玉之瑱也，象之揥也」傳「揥，所以摘髮也」釋文「揥也，勑帝反，摘也」「以摘，他狄反，本亦作**𢱭**，音同，本又作擿，又作謫，並非，謫，音丁革反，擿，音直**戟**反」。

137）十二篇上（37a）手部「摘，拓果樹實也」。p.136 參照。

138）「剔」「他狄反」は透母錫韻，「直戟反」は澄母陌韻，後に見える「直隻切」は澄母昔韻，日本漢字音だといずれもテキだが，現代中国語だと透母は tī と澄母は zhì。『廣韻』は澄母昔韻の一音のみ（入二十二昔・擲（直炙切）小韻「擲，……投也，搔也，振也」下に「擿，上同，出説文」。）段玉裁は，「搔也」の「擿」は透母錫韻，「投也」の「擿」は澄母昔韻とする。「摘」段注（p.136）參照。

139）『晉書』桓玄傳に「玄拔頭上玉導與之」，その他，『隋書』禮儀志、『舊唐書』輿服志、『新唐書』禮樂志、車服志にも「玉導」は見える。

140）『西京雜記』卷 2 に「武帝過李夫人，就取玉簪搔頭，自此後**宮**人搔頭皆用玉，玉價倍貴焉」。『白氏長慶集』卷 19 採蓮曲に「碧玉搔頭落水中」という句が見えるなど，「玉搔頭」は詩詞に散見する。

141）替（他計切）小韻。澤存堂本等今本は「揥」を「楴」に作る。余廼永校は「楴」を「揥」に改める。『廣韻』では「揥」は上平十二齊・低（都奚切）小韻に「揥，指也」，また去十三祭・跬（丑例切）小韻に「揥，佩飾」。

（二）讀みて「剔」の如くす。十六部。

（三）上文の「投」なる者は「擿つ也」[142] と轉注爲り。此の義, 音直隻の切, 今字「擲（テキ）」に作る。凡そ古書，投擲の字を用ひて皆な「擿（テキ）」に作る。許書に「擲」無し。

搔，剔也 (一)，从手蚤聲 (二)，

搔，剔（か）く也，手に从ふ，蚤の聲，

（校）二徐，「剔」を「括」に作る。

（一）「剔」，各本「捂」に作る。今正す[143]。「捂」なる者は「絜（くく）る也」[144]，其の義に非ず。「剔」なる者は「掊杷する也」[145]。「掊杷」は正しく「搔」の訓也。內則に「疾痛苛養」は「敬して之を抑搔す」, 注に曰く「抑は按, 搔（サウ）は摩也」と [146]。「馬を摩（な）づる」を「騷（サウ）」と曰ふ [147]。其の聲同じき也。又た疒部に「疥は搔瘍也」と[148]。瘍の手もて搔くを需むる者は之を「搔瘍」と謂ふ。俗に「瘙瘍」に作る。釋文、正義已に此くの如し [149]。

（二）穌遭の切，古音三部に在り。[150]

抭，剔也 (一)，从手介聲 (二)，

抭，剔く也，手に从ふ，介の聲，

（校）小徐，「剔」を「括」に作る。

（一）此れ「搔」と義同じ。「剔」, 小徐「捂」に作るは譌り, 大徐誤らず。『廣韵』に曰く,「抭」なる者は「物を揩抭する也」[151] と。『易』「介于石」，馬本「抭」に作り，「小石に觸るる聲」と

142）上篆參照。十二篇上（35b）。

143）段玉裁は「**剔**」と「**捂**」の説解のほかに根據を示さないが,『義證』『句讀』ともに玄應『一切經音義』卷 12･賢愚經第四卷「搔**蛘**，桑勞反，説文，搔，刮也，……」を引き，『句讀』はテキストも「搔，刮也」に改める。『玉篇』手部も「搔，蘇牢切，刮也」。

144）十二篇上（46a）手部「**捂**」説解。

145）四篇下（47b）刀部「**剔**」説解。二徐は「杷」を「把」に作る。段注に「杷各本作把, 誤, 手部曰, 掊, 杷也，木部曰，杷，收麥器，凡掊地如杷麥然，故**彖**言之曰掊杷」。

146）「問衣燠寒、疾痛苛癢，而敬抑搔之」注「苛，疥也，抑，按，搔，摩也」，釋文「苛，音何，疥也」「養，本又作癢，以想反」。阮元本は「養」を「癢」に作り，校勘記に釋文を引く。

147）十篇上（15b）馬部「騷, 摩馬也」。二徐は「摩」上に「擾也一曰」四字有り,「馬」下に「也」字無し。段注に「各本摩馬上有擾也一曰四字，淺人所增也，今**刪**正，人曰搔，馬曰騷，其意一也」。

148）七篇下（30b）疒部「疥，搔也」，大徐同じ，小徐祁刻本は「搔」を「瘙」に作る。段注は內則釋文（下注參照）等を引き，「皆以俗字改正字耳」という。

149）段注引く內則注の上文「苛, 疥也」釋文。「苛疥, 音界, 說文云, 瘙瘍也」。正義には「搔瘍」は見えない。

150）穌遭切（六豪）は今韵古分十七部表（『六書音均表』一）で二部。蚤聲は古十七部諸聲表（『六書音均表』二）で三部。

151）入十四黠・戛（古黠切）小韻。

云ふ[152]。按ずるに「石に扴せらる」は石に摩磢せらるるを謂ふ也。

（二）古黠の切，十五部。

𢷬，擊也（一），从手㚇聲（二），一曰，挈關牡也（三），

摽，擊つ也，手に从ふ，㚇の聲，一に曰く，關牡を挈する也，

（校）「挈關牡也」，大徐一篆一行本「關牡」を「門壯」に作る。小徐祁刻本「關」を「鑰」に作る。

（一）『左傳』「長木の斃るるは摽たざる無き也」，杜云く「摽は擊也」[153] と。柏舟の傳に曰く「摽は心を拊つ皃」[154] と。

（二）符少の切，二部。『左』釋文，敷蕭、普交二切。

（三）「關」「牡」は一物也。門部に見ゆ[155]。「挈」なる者は提げて而して之を啓く也[156]。葉鈔本，「關」を「門」に作る。[157]

𢷬，撓也（一），从手兆聲（二），一曰操也（三），國語曰，郤至挑天（四），

挑，撓す也，手に从ふ，兆の聲，一に曰く，操つ也，國語に曰く，郤至天を挑むと，

（校）小徐，「操」下に「爭」字有り，「國語」上に「春秋」二字有り。

（一）下文に云く，「撓」者は「擾す也」[158]，「擾」なる者は「煩はする也」[159] と。「挑」なる者は之を撥動するを謂ふ。『左傳』に「挑戰」[160] と云ふは是れ也。

（二）土凋の切，二部。

（三）「操」なる者は「拘へ擊つ也」[161]。小徐，「操」下に「爭」有り。

152）豫・六二象辭。王注は「介如石」，石のように堅介と解釋する。釋文「介于，音界，纖介，古文作砎，鄭古八反，云，謂磨砎也，馬作扴，云，觸小石聲」。

153）哀公十二年傳。釋文「不摽，敷蕭反，又普交反，擊也」。

154）邶風「靜言思之，寤辟有摽」傳。

155）十二篇上（13a）「關，關下牡也」。「訓讀説文解字注（三）」（『富山大学人文学部紀要』69，2018）p.129 參照。

156）十二篇上（26b）手部「挈，縣持也」段注に「下文云，提，挈也，則提與挈皆謂縣而持之也」。「訓讀説文解字注（六）」（『富山大学人文学部紀要』72，2020）p.52 參照。

157）『汲古閣説文訂』に「葉本挈作擊，誤。**關**，王氏宋本、葉本作門。壯，當依類篇作牡。挈**關**牡即所謂翹關也。列子、淮南子皆云，孔子能招北門之關，招與翹皆舉也。**關**牡重言之，門部曰，**關**，關下牡也，關如今之横**槓**，牡者又以直木爲牡上貫於關也，挈者縣特（ママ）也」。

158）十二篇上（36b）手部「撓」説解。次頁參照。

159）十二篇上（36b）手部「擾」説解。次頁參照。

160）宣公十二年傳「趙旃求卿未得，且怒於失楚之致師者，請挑戰，弗許」。

161）十二篇（50b）手部「**操**」説解。

（四）周語, 單襄公の語。韋本「佻天」に作る。注に云く「佻は偸(ぬす)む也」[162] と。今按ずるに「天の功を佻(ぬす)み以て己の力と爲す」は『左傳』「天實に之を置く, 而して二三子以て己の力と爲す」[163] と語意正しく同じ。然らば則ち許の意は「一に曰く，操爭」の爲に證を作す。

𢷬，挑也 (一)，从手夬聲 (二)，

抉，挑(くじ)る也，手に从ふ，夬の聲，

（一）「抉」なる者は，入りて以て之を出す所有る也。

（二）於說の切，十五部。

𢹂，擾也 (一)，从手堯聲 (二)，一曰捄也 (三)，

撓，擾す也，手に从ふ，堯の聲，一に曰く，捄也，

（一）此れ女部の「嬈」[164] 字と音義皆な同じ。

（二）奴巧の切，二部。

（三）「捄」篆下に曰く「一に曰く捊也」[165] と。是れ「撓」、「捊」[166]、「捄」三字，義同じ。

𢾊，煩也 (一)，从手夒聲 (二)，

擾，煩はする也，手に从ふ，夒の聲，

（一）「煩」なる者は「熱(あつ)き頭痛也」[167]。引申して煩亂の偁と爲す。「馴」と訓ずるの字、許に依れば「𢾊」[168] に作る。而して古書多く「擾」に作る。蓋し「擾」「馴」と訓ずるを得るは, 猶ほ「亂」「治」

162）周語中「晉之克也, 天有惡於楚也, 故儆之以晉, 而郤至佻天以為己力, 不亦難乎」, 韋昭注に「佻, **偸**也, **偸**天功，以為己力」。

163）僖公二十四年傳。

164）十二篇下（27a）「嬈, 苛也, 一曰, **擾**也, 从女堯聲, 一曰, 嬥也」。但し, 二徐は「**擾**下に「也」字無く, 大徐は「从女堯聲」四字が「一曰嬥也」下に在る。段注「奴鳥切，二部」。

165）十二篇上（48a）手部「捄，盛土於梩中也……，一曰捊也，……」。二徐は「捊」を「擾」に作る。段注に「各本作擾，今依韵會本正」。

166）十二篇上（33b）。p.122 參照。

167）九篇上（13a）「煩」說解。

168）二篇上（8b）牛部「**𢾊**，牛柔謹也」，段注に「按凡馴擾字當作此，**𢾊**作**𢾊**，廣雅，**𢾊**，柔也，善也」。

と訓ずるを得[169]，「徂」「存」と訓ずるを得[170]，「苦」「快」と訓ずるを得る[171]がごとし。皆な窮すれば則ち變じ，變ずれば則ち通ずるの理也[172]。『周禮』注に曰く，「擾猶ほ馴のごとき也」[173]。「猶」と言ふ者は，字本と「馴」と訓ぜず。

（二）而沼の切，古音三部に在り。[174] 今「擾」に作る。「憂」に从ふは俗字也。

𢷬，輚持也 (一)，从手局聲 (二)，

揭，輚して持つ也，手に从ふ，局の聲，

（校）小徐，「輚」を「戟」に作り，「持」下に「也」字無し。

（一）「輚して持つ」なる者は手輚の如くし而して之を持つ也。『左傳』「褚師出で，公其の手を輚にす」。杜云く「抵だ徒手にして肘を屈し輚の形の如くす」[175]と。鄭 斯干「矢の斯れ棘なるが如し」に注して云く「人弓矢を挾みて其の肘を輚にするが如し」[176]と。按ずるに古者輚の制，其の鋒は之を援と謂ふ。援は體斜めにして横に出づ。故に人其の肘（臂卩）[177]を下げ，其の掩と手を翹ぐれば，之に似る。亦た之を輚と謂ふ。鴟鴞の傳に曰く「拮据は輚揭也」と[178]。字本

169）『爾雅』釋詁下に「乂、亂、靖、神、弗、湥，治也」，また『尚書』皐陶謨「亂而敬」および盤庚中「茲予有亂政同位」の偽孔傳に「亂，治也」など。十四篇下（20a）乙部「亂，不治也，从乙**𤔔**，乙，治之也」。二徐は「不」字無し。段注に「各本作治也，从乙，乙治之也，从**𤔔**，文理不可通，今更正，亂本訓不治，不治則欲其治，故其字从乙，乙以治之，謂詘者**達**之也，轉注之法，乃訓亂爲治」。

170）『爾雅』釋詁下に「徂、在，存也」，郭注に「以徂為存，猶以亂為治，以曩為曏，以故為今，此皆詁訓義有反覆旁通，美惡不嫌同名」。二篇下（3b）辵部「**𨑨**，往也，……，徂，**𨑨**或从彳」。段注に「釋詁、方言皆曰，徂，往也，按鄭風匪我思且箋云，猶非我思存也，此謂且卽徂之叚借，釋詁又云，徂，存也，是也」。

171）『方言』卷2に「逞、苦、了，快也，自山而東或曰逞，楚曰苦」郭注に「苦而爲快者，猶以臭爲香，治爲亂，徂爲存，此訓義之反覆用之，是也」，卷3に「逞、曉、恔、苦，快也」。また『廣雅』釋詁二に「逞、苦、曉、恔，快也」。一篇下艸部「苦」段注は「快」と訓ずることに關して言及はない。

172）『周易』繫辭傳下に「易窮則變，變則通，通則久」。八篇上（23b）人部「偭，**鄉**也」段注にも「偭」を「**鄉**」と訓じ，また「背」と訓ずることについて，「此窮則變，變則通之理，如廢置、徂存、苦快之例」という。

173）天官・大宰「大宰之職，掌建邦之六典，以佐王治邦國，……，二曰教典，以安邦國，以教官府，以擾萬民」注。

174）而沼切（三十小）は，今韵古分十七部表（『六書音均表』一）では二部，古十七部諧聲表（『六書音均表』二）では三部に嬰聲が見え，「隷偏旁改同憂」とある。五篇下（37a）部「嬰」段注に「奴刀切，古音在三部」。奴刀切（六豪）は，今韵古分十七部表では二部だが，詩經韵分十七部表（『六書音均表』四）弟三部・古本音に「擾，嬰聲在此部，應劭音柔，左傳一見，今入小」。『左傳』昭公二十九年傳に「其後有劉累學擾龍，……」，『史記』夏本紀「學擾龍」集解に「應劭曰，擾音柔，擾，馴也，能順養得其嗜慾」。「柔」は尤韻。尤韻は今韵古分十七部表では三部。

175）哀公二十五年傳。

176）小雅。箋上文に「棘，戟也」。

177）四篇下（25a）肉部「肘，臂節也」。

178）豳風。「予手拮据」傳。阮元本は「**輚**」を「**𢷬**」に作る。釋文に「**𢷬**，京劇反，本亦作戟」，また「拮，音吉，又音結」「据，音居，拮据，**𢷬**揭也，韓詩云，口足為事曰拮据」。

と「𢾊」に作る。俗に手旁を加ふるは是に非ず。操作する所有り，其の肘を曲げて𢾊の如くし而して之を持つを謂ふ也。

（二）居玉の切，三部。

𢹂，𢾊掘也 (一)，从手居聲 (二)，

据，𢾊掘する也，手に从ふ，居の聲，

（校）小徐，「𢾊」を「戟」に作る。

（一）鴟鴞「予が手拮据す」傳に曰く「拮据は𢾊掘也」[179] と。『公羊』注「据」を叚りて「據」と爲す [180]。

（二）九魚の切，五部。

𢹂，剖也 (一)，从手葛聲 (二)，一曰撻也 (三)，

𢹂，剖く也，手に从ふ，葛の聲，一に曰く，撻（むちう）つ也，

（一）此れ「扴」[181] と音義略ぼ同じ。

（二）口八の切，十五部。

（三）「撻」[182] は下文に見ゆ。

𢹂，拓果樹實也 (一)，从手啻聲 (二)，一曰指近之也 (三)，

摘，果樹の實を拓る也，手に从ふ，啻の聲，一に曰く，指 之に近づく也，

（一）「拓」なる者は「拾ふ也」[183]。「拾」なる者は「掇る也」[184]。「掇」なる者は「拾ひ取る也」[185]。「果樹の實」なる者は果有るの樹の實也。之を拓ふは、之を摘と謂ふ。之を引申して、凡そ他の取るも亦た摘と曰ふ。此の篆「擿」と音義殊れり。[186]

（二）他歷の切，又竹歷の切。按ずるに竹歷の切，是也。他歷は則ち「擿」の音爲り [187]。十六部。

179）上注參照。

180）十二篇（27b）手部「據，杖持也」段注にも「據或作据，……，按何氏公羊傳注據亦皆作据，是叚借拮据字」。「訓讀説文解字注（六）」（『富山大学人文学部紀要』72,2020）p.56 參照。

181）十二篇上（36a）手部。p.132 參照。

182）十二篇下（49b）手部「撻，鄉飲酒罰不敬，撻其背」。

183）十二篇（43a）手部「拓」説解。

184）十二篇（43b）手部「拾」説解。

185）十二篇（43b）手部「掇」説解。

186）十二篇（35b）手部「擿」段注（p.131）參照。

187）「擿」段注の主張と同じ。根據は鄘風・君子偕老の釋文（注 136））か。注 138）參照。

宋本「竹歴」，今本「竹厄」に改め[188]，以て『廣韵』[189]に同じうす。

（三）別の一義。

𢷎，擖也[(一)]，从手害聲[(二)]，

搳，擖く也，手に从ふ，害の聲，

（一）「擖」[190]篆と宖ひに聯綴す。

（二）胡秸の切，十五部。

𢾊，斬取也[(一)]，从手斬聲[(二)]，

𢾊，斬り取る也，手に从ふ，斬の聲，

（校）「斬取」，大徐「暫」に作り，小徐「塹」に作る。

（一）各本「斬取」二字を「暫」に作る。今正す。「斬」なる者は「截也」[191]，物を斷つを謂ふ也。「暫」は其の義に非ず[192]。禮器「𢾊(か)り而して播くこと有る也」[193]。長楊の賦「麾城𢾊邑」[194]，蒼頡篇に曰く，「𢾊は拍取する也」と。鄭曰く，「𢾊の言は芟也」と。按ずるに「芟は艸を刈る也」[195]。「𢾊」本と「芟夷」[196]と訓ず。禮器の注は，此に於て少なく與へ，分を得て以て彼に與ふるを謂ふ。是れを「芟殺して與ふる所有り」と爲す。上貴の分を𢾊殺し以て賤者に布徧す。之を「𢾊り而して播く」と謂ふ。故に『廣雅』之に本づきて説を爲して曰く「𢾊」なる者は「次也」[197]と。是れ鄭『禮』に注するの義，而れども「𢾊」の本義には非ざる也。

188）一篆一行本は「厄」を「戹」に作る。

189）「摘」は入二十一麥・摘（陟革切）小韻と入二十三錫・逖（他歴切）小韻に見える。「竹」は「陟」と同じく知母，「歴」は錫韻，「厄」「戹」（於革切）は麥韻。

190）十二篇上（37a）。前ページ參照。

191）十四篇上（57b）車部「斬」説解。十二篇下（39a）戈部に「**截**，**斷**也」。

192）七篇上（9b）日部「暫，不久也」。

193）注に「**𢾊**之言芟也，謂芟殺有所與也，若祭者貴賤皆有所得不使虛也」。

194）『文選』卷9。李善注に「顔監曰，**𢾊**，舉手擬也，蒼頡篇曰，**𢾊**，拍取也，善曰，鄭禮記注曰，**𢾊**之言芟也，字林曰，**𢾊**，山檻切」。

195）一篇下（43a）艸部「芟」説解。

196）「芟夷」は，『周禮』地官・稻人「凡稼澤夏以水殄草而芟夷之」，『左傳』隱公六年傳「見惡如農夫之務去草焉，芟夷薀崇之，絶其本根，勿使能殖，……」では草を刈る意で用いられているが，引伸して，『文選』卷45孔安國・尚書序「芟夷煩亂，翦截浮辭」，卷56陸倕・石闕銘并序「莫不芟夷翦截」，『文選』序「豈可重以芟夷，加之剪截」などのように「翦截」と組み合わせて用いられ，文辭を刪除する意を表すこともあり，『三國志』蜀書五・諸葛亮傳「亮説權曰，……，今操芟夷大難，略已平矣，遂破荆州，……」のように，叛乱を除く意で用いられることもある。

197）釋詁三上「序、倢、塹、佴、秩、班、坒、笓、差、第，次也」。『疏證』は「塹」について，『禮記』禮器の經注を引き，「段氏若膺云，芟殺之殺，所拜反，芟殺謂由多漸少，皆有等衰，故廣雅訓塹爲次也」。

（二）昨甘の切，八部。『廣韵』「掣」に作り，「斬取也，山檻切」と[198]。

[illegible]，摺也（一），从手劦聲（二），一曰拉也（三），

協，摺也，手に从ふ，劦の聲，一曰拉也，

（校）小徐，「拉」を「擸」に作る。

（一）『公羊傳』に曰く「公子彭生をして桓公を送らしめ，其の乘に於いて，幹を協（くじ）き而して之を殺す」[199]。「幹」なる者は脅骨也[200]。何曰く「協」なる者は「折る聲也」と。「協」或ひは「擒」に作る者は或體也。或ひは「拉」に作る者は叚借字也。

（二）虛業の切，七部。

（三）上文に曰く「拉」なる者は「摧（くじ）く也」[201]。

[illegible]，敗也（一），从手習聲（二），

摺，敗（やぶ）る也，手に从ふ，習の聲，

（一）「敗」なる者は「毀（こぼ）つ也」[202]。今義は摺疊爲り[203]。

（二）之涉の切，八部。

[illegible]，束也（一），从手㸚聲（二），詩曰，百祿是𢽾（三），

𢽾，束（つか）ぬる也，手に从ふ，㸚の聲，詩に曰く，百祿是れ𢽾（あつ）まると，

（一）「束」なる者は「縛る也」[204]。鄉飲酒義に曰く「西方なる者は秋，秋の言爲るは愁也」と，「愁

198）上五十四檻・掣（山檻切）小韻。

199）莊公元年。阮元本は「協」を「擒」に作る。阮元校勘記に「唐石經諸本同，釋文作協幹，云，本又作擒，亦作拉，皆同，按詩南山正義引作拉幹而殺之，玉篇引作拉公幹而殺之，皆作拉字○段玉裁云，依說文當作協，許云，摺也，从手劦聲，作擒者或體也，作拉者假借字也」。

200）四篇下（23b）肉部「肋，脅骨也」段注に「亦謂之幹，榦者翰也，如羽翰然也」。四篇下の段注には「脅骨」を「幹」と稱することに關わる説が散見する。骨部「骿」（15a）注に「肋，脅骨也，廣雅榦謂之肋，是脅骨，一名榦」，「骭」（17a）注に「按骭之言榦也，榦者本也，人體之阯也，脅骨何以亦名榦也，曰，脅榦見於左傳楄柎藉榦公羊**協**公榦而殺之，古榦翰通用，毛詩翰字多爲榦之假借，脅榦乃翰之假借，脅肋如鳥之羽翰分佈也」，「**肱**」（23a）注に「宋本、李燾本皆作骨，俗本作肉，非也，此如脅爲兩膀，幹爲脅骨，正名百物，不可紊也」など。

201）十二篇上（26a）手部「拉」説解。段注は『公羊傳』注を引き，「按協亦作拉，此上文摧一曰折也之義」。「訓讀説文解字注（五）」（『富山大学人文学部紀要』71）p.92 參照。

202）三篇下（37b）支部「敗」説解。

203）『廣韻』入二十七合・拉（盧合切）小韻に「摺，敗也」，また入二十九葉・讋（之涉切）小韻に「摺，摺疊也」。

204）六篇下（8b）束部「束」説解。

は讀みて摯と爲す」[205]。按ずるに韋部に「韇は收束する也」,「或ひは要に从ひ」て「韆」に作り,「或ひは秋手に从ひ」て「摯」に作ると[206]。「摯」は卽ち「𢷬」。然らば則ち此の篆實に重出爲る也。

（二）卽由の切，三部。

（三）商頌，長發の文。今『詩』「遒」に作る。傳に曰く，「遒は聚也」と。[207]

𢷬，曳聚也（一），从手婁聲（二），

摟，曳きて聚むる也，手に从ふ，婁の聲，

（校）小徐，「曳」下に「也」字有り。

（一）此れ當に「曳く也，聚むる也」に作るべし。各本上「也」字を奪す。山有樞に曰く「曳せず摟せず」，傳に曰く「摟亦た曳也」[208]と。此れ曳訓の本づく所也。「曳」なる者は「臾曳する也」[209]。釋詁に曰く「摟、聚也」[210]。此れ聚訓の本づく所也。趙『孟子』に注して曰く,「摟は牽く也」[211]と。此れ曳義の引申也。

（二）洛侯の切，四部。

扽，有所失也（一），从手云聲（二），春秋傳曰，扽子辱矣，

扽，失なふ所有る也，手に从ふ，云の聲，春秋の傳に曰く，子を扽（うしな）ふは辱なりと，

（校）大徐，「从手云聲」四字「矣」下に在り。

（一）成公二年『左傳』に，石稷 孫良夫に謂ひて「曰く，子は國卿也，子を隕ふは辱なり」[212]と。許據る所「扽」に作る。正に失なふを謂ふ也。『戰國策』に「礛礝を被（かうむ）り，微繁を引き，淸風

205）鄭注。下文に「摯，斂也」。

206）五篇下（42b）「**韇**，收束也，从韋**䋣**聲，讀若酋，**韆**，**韇**或从要，摯，**韇**或从秋手」。

207）阮元校勘記無し。釋文「是遒，子由反，又在由反，聚也」。「子由反」は「卽由切」と同音。

208）唐風。阮元本は「摟を「婁」に作る。釋文「弗曳，以世反」「弗婁，力具反，婁亦曳也，馬云牽也」。十二篇下（26b）女部「婁，空也」段注では箋で「斂」と訓じられる角弓の「式居婁驕」の「婁」について「摟之叚借」とする。『説文』に據れば，「曳」と訓じられる「婁」も「摟」の叚借である。

209）十四篇下（33a）申部「曳」説解。段注に「臾曳雙聲，猶牽引也」。

210）釋詁下「摯、斂、屈、收、戢、蒐、裒、鳩、樓，聚也」。阮元本は「摟」を「樓」に作る。釋文に「摟，力侯反，從手，本或作樓，非」。阮元校勘記に「樓，唐石經、單疏本、雪牕本同」として，釋文を引く。樓唐石經單疏本雪**牕**本同釋文摟力侯反從手本或作樓非樓唐石經單疏本雪牕本同釋文**摟**力侯反從手本或作樓非樓唐石經單疏本雪牕本同釋文**摟**力侯反從手本或作樓非樓唐石經單疏本雪**牕**本同釋文**摟**力侯反從手本或作樓非唐石經單疏本雪**牕**本同釋文**摟**力侯反從手本或作樓非唐石經單疏本雪**牕**本同釋文**摟**力侯反從手本或作樓非唐石經單疏本雪**牕**本同釋文**摟**力侯反從手本或作樓非唐石經單疏本雪**牕**本同釋文**摟**力侯反從手本或作樓非

211）告子下「踰東家牆，而摟其處子，則得妻，不摟則不得妻，則將摟之乎」注。

212）注「隕，見禽獲」釋文「隕子，于敏反」。

に折け而(くじ)して抗(お)つ」[213] と。此れ「抗」を叚りて「隕」と爲す也[214]。『史記』東粤列傳「戰はず而して耘ふ, 利これより大なるは莫し」[215] と。閩粤戰はずして而して其の王の頭を失するを謂ふ。此れ「耘」を叚りて「抗」と爲す也。

（二）于敏の切，十三部。

𢿱，從旁持曰披 (一)，从手皮聲 (二)，

披，旁(かたは)ら從(よ)り持つを披と曰ふ，手に从ふ，皮の聲，

（一）士喪禮「披を設(まう)く」[216], 注に曰く「披は, 柳を棺上に絡[217] め, 戴に貫ぬき結ぶ。人君[218] 旁らに之を牽き，以て傾虧に備ふ」又た「披を執る者，旁らに四人」[219]，注に曰く「前後左右各おの二人」。此れ「旁從り持つ」の義也。五帝本紀「黄帝, 山に披り道を通ず」[220], 徐廣曰く「披, 他本亦た陂字に作る。蓋し當に音詖たるべし。陂なる者は其の邊に旁るの謂ひ也」。按ずるに「披」「陂」皆な其の邊に旁るの意有り。中散[221] 能く之を知る。而して『索隱』に「披, 音字の如し, 山林艸木を披きて行き，以て道を通ずるを謂ふ也」と云ふ。此れ則ち司馬貞古義を知らざるの言。蓋し俗解「披」を訓じて「開」と爲す。『廣韵』に云く「披は開也, 分也, 散也」[222]。木部「柀」は「析也」と訓ず[223]。柀靡の字此くの如く作る。而して淺人「披」を以て「析」と訓じ,「柀靡」を改めて「披靡」と爲す。能く諟正する者有る莫し。

213）楚策・莊辛謂楚襄王章。姚本（士禮居叢書本）は「被」を「彼」に作る。鮑注本は「礛」を「剴」に作る。

214）十四篇下（5a）**自**部「隕，從高姚宏校本下也」。

215）『史記』は「粤」を「越」に作る。『漢書』西南夷兩粤朝鮮傳・閩粤は「耘」を「殞」に作る。『集解』に「徐廣曰，漢書作殞，耘義當取耘除，或言耘音于粉反，此楚人聲重耳，隕耘當同音，但字有假借，聲有輕重」。『索隱』「耘音云，耘，除也，漢書作隕，音于粉反」。『集解』『索隱』に從えば,「戰はず而して耘(のぞ)く」と讀める。また『廣雅』釋詁三下に「揣、……、耘、撥、祓，除也」。

216）既夕禮經。

217）阮元本は「絡」を「輅」に作る。校勘記に「輅，通典、集釋俱作絡，案輅絡古字通」。

218）「君」，皇清經解本、保息局本段注同じ。『儀禮』注は「君」を「在」に作る。そうすれば,「人旁に在りて之を牽き，以て傾虧に備ふ」と讀める。

219）既夕禮記。

220）集解に「徐廣曰，披，他本亦作陂，字蓋當音詖，陂者旁其邊之謂也，披語誠合今世，然古今不必同也」。索隱「披，音如字，謂披山林草木而行以通道也，徐廣音詖，恐稍紆也」。

221）『宋書』徐廣傳「永初元年，詔曰，祕書監徐廣，學優行謹，歷位恭肅，可中散大夫」。『史記正義』論例謚法解・論注例に「又徐中散作音訓, 校集諸本異同, 或義理可通者, 稱一本云、又一本云, 自是別記異文」。

222）上平五支・鈹（敷羈切）小韻に「披，又作**𢿱**，開也，分也，散也」，上四紙・**𢿱**（匹美切）小韻に「披，開也，又偏羈切」。

223）六編上（8b）「柀，黏也，……，一曰析也」。

（二）敷羈の切，舊と彼義の切。古音は十六部に在り。[224]

𢷎，引縱曰瘳 (一)，从手，瘛省聲 (二)，

瘳，引きて縱つを瘳と曰ふ，手に从ふ，瘛の省聲，

（校）小徐，「瘛省聲」を「**瘛**聲」に作る。

（一）『爾雅』釋文「引きて而して之を縱つを瘳と曰ふ」に作る[225]。「引は弓を開く也」[226]。「縱は緩むる也，一に曰く，舍つる也」[227]。按ずるに「引きて縱つ」なる者は，宜しく遠かるべくして之を引きて近からしめ，宜しく近かるべくして之を縱ちて遠からしむるを謂ふ。皆な牽掣と爲す也。『釋文』據る所の『爾雅』に曰ふ「弓弨は掣曳也」の如くするを必せず。俗字「搘」[228]に作り「扯」[229]に作る。聲形皆な異れり。

（二）尺制の切，十五部。俗に「掣」に作る[230]。

𢷎，積也 (一)，从手此聲 (二)，詩曰，助我舉𢷎 (三)，一曰摵頰旁也 (四)，

𢷎，積也，手に从ふ，此の聲，詩に曰く，我を助け𢷎を舉ぐと，一に曰く，頰旁を摵づる也，

（校）大徐，「从手此聲」四字「摵頰旁也」下に在り，「摵」上に「一曰」二字無し。

（一）小雅・車攻に曰く「我を助け柴を舉ぐ」，傳に曰く「柴は積也」，箋に云く「中らずと雖も，必ず中る者を助けて積禽を舉ぐる也」と。「柴」，許據る所「𢷎」に作る。此聲、責聲古へ同じく十六部に在り[231]。疊韵を以て訓と爲す。

224）『六書音均表』一・今韵古分十七部表では，敷羈切（五支），彼義切（五寘）いずれも十六部，二・古十七部諧聲表では，皮聲は十七部，四・詩經韵分十七部表・十七部・古本音に「陂，皮聲在此部，詩澤陂一見，莊子生於陵陂與施爲韵，今入支、寘，唐玄宗不知洪範遵王之義義讀俄，而改頗爲陂以合之，又不知陂之本讀坡也」。

225）釋訓「弓弨，掣曳也」釋文「掣，本或作**㩁**，同，充世反，說文云引而縱之」。黄『彙校』に「**㩁**，宋本同，盧本改作瘳」。法偉堂校記「**㩁**，盧依說文改**瘳**」。

226）十二篇下（58b）弓部「引」說解。

227）十三篇上（6b）糸部「縱」說解。但し，段注本は「舍」を「捨」に作り，注に「各本作舍也，由俗以舍捨通用也，今正，捨者釋也」という。

228）『大廣益會玉篇』手部第六十六「搘，充野切，搘開也」，『廣韻』上三十五馬・𨑓（昌者切）小韻「搘，裂開」。

229）『六書故』卷 14「扯，齒者、齒只二切，拏曳也，與褫通（又作搘，類篇曰，列也，又作**抯**，淺野切，取也）」。『康熙字典』卯集中・手部「扯，正字通俗搘字，正韻箋扯本作搘」。

230）『大廣益會玉篇』手部第六十六「**瘳**，充世切，牽也，說文曰，引縱曰**瘳**，**摯**，掣，並同上」。

231）古十七部諧聲表（『六書音均表』二）では，**賣**（責）聲は十六部だが，此聲は十五部（注 24）參照）。七篇上（48a）禾部「積」則歷切（二十三錫）は「十六部」。

（二）前智の切。『詩』釋文，『說文』を引きて「士賣反」[232] と。『音隱』に出づ [233]。

（三）西京の賦「胔を舉ぐ」に作る。薛注して「胔は死せる禽獸將に腐らんとするの名」と。[234]

（四）「一に曰く」二字，『廣韵』[235] 及び小徐本及び『集韵』[236]、『類篇』[237] 皆な之有り。是也。此れ無くんば則ち上文「積也」と矛盾す。而して「積也」は卽ち車攻を釋し，又た「曰圛」[238]、「聖讒說」[239] を引き而して之を釋するの比に非ず [240]。上文「掘」下に「𢽾づる也」と云ひ [241]，此の「𢽾」下に「頰旁を掘づる也」と云ふ。是れ二篆轉注爲り。亦た「考」「老」の例。「頰旁を掘でて以て老を休んずるべし」は『莊子』に見ゆ。『莊子』亦た「眥姺」に作るは叚借字。[242]

𢽾，搖也 (一)，从手卓聲 (二)，春秋傳曰，尾大不掉 (三)，

掉，搖（うご）かす也，手に从ふ，卓の聲，春秋の傳に曰く，尾大なれば掉（ふる）はずと，

（一）「掉」なる者は之を搖（うご）かして過ぎたる也。「搖」なる者は之を掉（うご）かして及ばざる也。許 之を渾言す。

（二）徒弔の切，二部。

（三）『左傳』昭十一年の文。[243]

232）釋文「舉柴，子智反，又才寄反，積也，說文作**𢽾**，士賣反」。

233）『隋書』經籍志一・經・小學，また『舊唐書』經籍志・甲部經錄・詁訓類　小學類に「說文音隱四卷」。

234）『文選』卷 2。「收禽舉胔數課衆寡」注。李善注にも同文の注が見える。

235）去四絳・漬（疾智切）小韻に「**𢽾**，說文積也，一曰**掘**頰旁也」。

236）去五寘・漬（疾智切）小韻に「**𢽾**・柴，說文積也，引詩助我舉**𢽾**，一曰**掘**頰旁也，或作柴」。

237）手部「**𢽾**，子智切，又疾智切，說文積也，引詩助我舉**𢽾**，一曰**掘**頰旁也，又竒寄切，又鉏佳切」。

238）六篇下（11a）口部「圛，回行也，从囗翌聲，商書曰，曰圛，圛者，**𠂆**雲半有半無，讀若驛」。二徐本は「**𠂆**」下に「者」字無し。「商書」は洪範。阮元本は「曰圛」を「曰驛」に作る。校勘記に「曰驛，孫志祖云，案經文本作雺圛，而傳讀為蒙驛耳，孔疏猶作雺圛，且云雺聲近蒙，圛即驛也，可證經文之作雺圛矣，不知何時徑改經為蒙驛，沿誤至今，幸疏中字多不及全改，後之學者猶可尋求是正也○按改作蒙驛，在唐天寶開寶時，說詳段玉裁尚書撰異」。『古文尚書撰異』は卷 13「曰圛」。

239）十三篇下（31a）土部「**㙍**，吕土增大道上，从土次聲，聖，古文㙍，从土卽，虞書曰，龍，朕聖讒說殄行，聖，疾惡也」。「龍，朕聖讒說殄行」は舜典に見える。『古文尚書撰異』卷 1 下「帝曰龍朕聖讒說殄行」參照。

240）三篇上（25b）言部「**讀**」注「凡稱經傳而又釋其義者，皆必其義與字本義不同，如聖讒說、曰圛」，五篇上（51a）皿部「**盛**」注「……，非**盛**之本訓，猶圛下引商書曰圛而又釋之，聖下引唐書聖讒而又釋之，非圛聖之本義」，十篇下（26b）心部「忼」注「凡許引經說假借，如……、聖讒說、曰圛，皆是淺人以忼龍與忼慨義殊，乃妄改爲一曰矣」（38a）心部「**悇**」注「此引書而釋之，必釋之者，以書義與字本義別也，凡引曰圛而釋之曰，圛升云半有半無，……，引朕聖讒說殄行而釋之曰，聖疾惡也皆此例」など，段注は，說解が經傳を引いて，字の本義と異なる叚借義（廣義）を釋する例として，しばしば「曰圛」「聖讒說」を挙げる。ここでは，『詩』引用は本義の用例であり，それとは異なるというのである。

241）十二篇上（32a）手部。p.117 參照。

242）「揃」「**掘**」段注および注 2）參照。

243）釋文「不掉，徒弔反」。

𢱭，動也 (一)，从手畜聲 (二)，

搖，動かす也，手に从ふ，畜の聲，

（一）余招の切，二部。

𢱭，動搈也 (一)，从手容聲 (二)，

搈，動搈する也，手に从ふ，容の聲，

（一）「動搈」は漢時の語。『廣雅』に曰く「搈は動也」[244]。

（二）余隴の切，九部。

𢱭，當也 (一)，从手貳聲 (二)，

撰，當也，手に从ふ，貳の聲，

（一）『廣雅』に曰く「撰，當也」[245]。

（二）直利の切。曹憲『説文』を引きて「直二反」と。按ずるに「直異の切」[246] に作る者は誤り。

𢱭，聚也 (一)，从手酋聲 (二)，

揂，聚也，手に从ふ，酋の聲，

（一）商頌「百祿是れ遒まる」，傳に曰く「遒は聚也」と [247]。按ずるに傳は此の「遒」を「揂」の叚借字と爲すを謂ふ。

（二）即由の切，三部。

𢱭，固也 (一)，从手臤聲 (二)，讀若詩赤舄掔掔 (三)，

掔，固（かた）き也，手に从ふ，臤の聲，讀みて詩の赤舄掔掔たりの若くす，

（校）小徐，「詩」下「曰」字有り。

（一）掔（カン）の言は堅（ケン）也，緊（キン）也。手 之を持ちて固きを謂ふ也 [248]。或ひは叚借して牽字と爲す [249]。如

244）釋詁一下。『疏證』に「搈之言踊也，説文，搈，動搈也，楚辭九章云，悲秋風之動容兮韓子揚推篇云，動之溶之，溶、搈、溶（ママ）竝通，説文，傛，不安也，義與搈亦相近」。『博雅音』「搈，容」。

245）釋詁三上。『疏證』は『説文』を引く。『博雅音』「直利，説文直二」。

246）大徐本反切。直異切（七志）一部。直利切、直二反（六至）十五部。支･脂･之の分部については『六書音均表』一「弟一部、弟十五部、弟十六部分用説」參照。

247）長發。「摯」段注（p.138）參照。

248）三篇下臤部に「堅，土剛也」（24a），「緊，纏絲急也」（23b）。

249）二篇上（8a）牛部「牽，引而前也」。

へば『史記』「鄭襄公肉袒して羊を掣く」[250] は卽ち『左傳』の「羊を牽く」[251] 也。俗に「慳吝」の字を用ふるは，亦た「掣」の俗爲り [252]。

（二）苦閑の切，十四部。

（三）「掣掣」，當に豳風に依りて「几几」に作るべし。傳に曰く「几几は絢たる皃」[253]。「掣」は十二部に在り [254]。「几」は十五部に在り。「讀みて若し」と云ふ者は古合音也。

使用テキスト

『説文解字注』

　嘉慶二十年經韵樓本影印（上海古籍出版社，1981 年）

必要に應じて，下の版本を參照

　嘉慶二十年經韵樓本影印（藝文印書館，1981 年）

　皇清經解本

　同治六年保息局補刊本

『十三經注疏』

　阮元本影印（藝文印書館，1989 年）

『經典釋文』

　通志堂本

本稿は JSPS 科研費 JP18K00349 の助成を受けたものである。

250）鄭世家。

251）宣公十二年傳「鄭伯肉袒牽羊以逆」，注「肉袒牽羊示服為臣僕」。

252）大徐本注記に「臣鉉等曰, 今別作慳, 非是」。『大廣益會玉篇』心部第八十七に「慳, 口閑切, 慳悋也」。

253）狼跋。

254）臤聲は古十七部諧聲表（『六書音均表』二）では十二部。苦閑切（二十八山）は今韵古分十七部表（『六書音均表』一）では十四部。